

## 積み重ねた時間の先に

私は一度諦めた夢に再び挑戦している。高校生の頃、看護師を志した。しかし、自分の判断一つで誰かの人生を左右してしまうかもしれないという責任の重さに不安を感じた。その重圧に向き合う覚悟が、当時の私にはできず夢を手放した。それでも医療への思いは消えず、人と医療をつなぐ仕事がしたいと考え、医療機器を製造する会社に就職した。製品が患者さんの命を支えていると思うと、大きなやりがいを感じ、十三年間、責任と誇りを持って働いてきた。再び看護の道を志したきっかけは、祖父の突然の病だった。病院に駆けつけた時、祖父は人工呼吸器を装着し、ベッドの上で眠っていた。医師からは「血圧が下がっていき、目を覚ますことはない」と告げられた。異変に気づけなかった後悔と、何もできずに別れを迎えるかもしれない不安に胸が締めつけられた。家族で交代しながら祖父を見守る中、看護師の姿が心に残った。眠る祖父に「苦しいね、ごめんね」と優しく声をかけながらケアをする姿から、祖父が一人の人として大切にされていることが伝わり、私たち家族の心も支えられた。不安の中で、看護師の存在の大きさを実感した。その後、祖父は回復し、治療が続けられるまでになった。私は付き添い、話しかけ、身の回りの世話をしながら、病気と向き合う祖父の姿に触れた。泣き、怒り、それでも自分らしく生きようとする祖父と向き合った時間は、今も私を支えている。その時間を支えていたのが、医療者だった。担当医も、私の話真剣に向き合い、「一緒に頑張りましょう」という言葉に救われた。その経験から、看護とは処置を行うことだけでなく、患者や家族の思いに寄り添い、希望や安心を与える存在であると心から実感した。さらに自身の出産時、看護師や助産師に支えられた。悪阻で入院した際、「おはよう」とお腹に向かって声をかけてくれ、元気をもらったこと、痛みや不安でいっぱいの人に寄り添い続けてくれた姿は今も忘れられない。患者の立場で感じた安心感は、祖父の時の思いと重なり、看護の持つ力をより深く実感した。思い通りにならない出産や育児の経験も、人の心に寄り添うとはどういうことかを考える大切な学びとなっている。

私は一度、責任の重さに向き合う覚悟ができず、夢を手放した。しかし今は、その責任から目を背けず、真正面から向き合いたい。突然の病で不安の中にいる患者や家族、そして出産や育児の中で心身ともに揺れ動く母親の心に寄り添える看護師になりたい。医療を外側から支え続けた十三年間も、決して遠回りではなかった。その時間があつたからこそ、責任の重さから目を背けず、命の側に立ちたいと心から思えるようになった。私にとっての看護とは、誰かの不安に気づき和らげ、支えとなれる存在になることである。そしてその看護が、患者や家族にとって安心して身を委ねられるものであり続けてほしいと願っている。あの日支えられた家族の一人として、今度は支える側へ。その決意を胸に、これからの学びを重ねていきたい。それが、私の選んだ看護である。